

「ナルニア国物語」の不思議な魅力と著者が伝えたいこと

三 上 真里奈

C.S.ルイス原作の「ナルニア国物語」には、様々な魅力が転がっている。個性的なペヴェンシー家の四人の子供達から人間と言葉を交わす動物達やこの映画のメインとなるナルニア国の創造主ライオンとナルニア国を100年間冬に閉じ込めている悪人の魔女など様々な登場人物が描かれている。さらに、舞台となったイギリスの風景描写が力強く感じられる。そこで私は、数ある魅力の中から厳選しそれを踏まえた上で著者の伝えたいことを取り上げる。

まず、私が感じた魅力の一つにナルニア国へ通じる不思議な道がある。それは、現実世界から非現実世界へと通じる入口であり、第1章～3章まで入口のスタイルが違う。例えば1章では、ペヴェンシー家の妹ルーシーが古い衣装箆筒を通して行きナルニア国を偶然に訪れることになる。また2章はペヴェンシー家の四人の子供達が見えない力に引き込まれ駅のホームから海に着いていたり、そして3章は従兄弟の家の絵画に吸い込まれてしまう。これらには読者の心を捉えた著者のルイスらしい発想がみえてくると感じた。

二つ目は故郷の風景である。構成要素がすべて過去のイングランド、アイルランドの風景に属するものを基に描かれている。例えば、映画に登場する教授の邸、雪景色の森、魔女の魔法が解けて春が訪れた田園の風景等である。この力強い風景描写は作者自身が経験した自然と調和した空想から生じていること、また著者が幼少時代に好んで歩いた湖や川、森や穏やかな丘陵を彷彿とさせている。このように自身が生まれ育った場所を愛する強い気持ちが忠実に描かれていると感じる。

三つ目は魔法を使用していることである。例えば魔女には魔法の杖があり人や動物を石に変える力を持ち、好きなお菓子や飲み物を出すこともできる。一方でライオンは、石にされた人や動物を生き返らせる力と人間を現実世界へ戻す入口をつくることができる。このように様々な形で使われていたりすることがわかる。

このように色々みてきたが、今一番感じていることはこの作品は児童文学ということもあり、子供心をくすぐるような不思議な魅力が沢山あるということがわかった。その中で著者は自分が大人になっても本を読んだときまた自分が子供の気持ちに戻り、読んだときの快感やその気持ちを忘れてほしくないという願いがこの本に込められていると思う。また、一つの作品に対して著者が伝えたいことや意図がこの映画を通して捉えることができた。例えば、風景に関していえばナルニア国に春が訪れた場面においては点在する白樺の木立、咲き誇るスイセン、クロッカスのように一つの花からイギリスの風景を演出させている。また、お菓子の場面においてもわざとイギリスの有名なターキッシュ・デライトを挙げその中には魔法がかけられていたりしている。さらにこの作品は善と悪が明確に示されている。この点についても作者の理想とする意図があるのではないだろうかと感じる。実際に私が思う以上に宗教に関することは本だけではわからないが、映画と比較をしたらそれが大きく違うことにも気づく。これらが私達読者に対して伝えたいことだと思っているのではないかと感じている。

この作品を通して、不思議な魅力そして著者が伝えたいこと、また英国の児童文学の魅力や面白さを同時に知る事ができたと感じている。そして幼いときに読んだ児童文学も幼少の気持ちに戻りまた読み返したいと思うようにもなった。その時の快感や感想を今後も大切にしていきたい。是非一度皆さんも本棚の埃を払い一冊読んでみてはいかがだろうか。

(指導教員 中村敦志)